

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：32620

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K15933

研究課題名(和文) 母親役割をもつがんサバイバーが子供に病状説明をする際に生じる心理的葛藤と意志決定

研究課題名(英文) Psychological conflicts and decision making in explaining conditions to children of cancer survivors who have a mother's role

研究代表者

栗原 明美 (Kurihara, Akemi)

順天堂大学・保健看護学部・先任准教授

研究者番号：50464780

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は母親役割をもつがんサバイバーが子供に正確な病状を説明することで、穏やかに治療を継続できるよう支援していくための基礎資料を得ることであった。調査の結果、母親役割をもつがんサバイバーは、「自分自身に対する葛藤」、「自身の娘に対する葛藤」、「夫に対する葛藤」、「自身の母親に対する葛藤」という4つの葛藤を抱えていた。問題は、家族の成因が自分についてどのように感じているのかわからないことにある。家族成因とのコミュニケーション不足を解消していく必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の社会的意義は、結果を学会発表等を通じて広く公表していくことで、母親役割をもつがんサバイバーの現状と葛藤について、家族を含めた周囲の人々にとってサバイバーに対する理解が深まる結果となるため、何らかの支援に繋げることが可能となる。またがんサバイバーにとっても自身の現状を省みる機会となり、自己理解が深まると共に、より良い療養生活を続けるためには、家族間のコミュニケーション不足は改善していくべきであることを認識する機会となりえる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to obtain basic data for cancer survivors who have a maternal role to help children to continue treatment gently by explaining accurate medical conditions to their children. As a result of the survey, cancer survivors with a mother role had four conflicts: "conflict with oneself", "conflict with one's own daughter", "conflict with one's husband", and "conflict with one's own mother". The problem is that cancer survivors with the role of mother do not know how their family feels about her. It was suggested that it is necessary to eliminate the lack of communication with family members.

研究分野：成人看護学、がん・慢性期看護

キーワード：女性がん患者 母親役割 被援助志向性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

国立がん対策情報センターによると、がんの年齢調整死亡率は減少傾向にあるが、罹患率は増加傾向を示している。第2次がん対策推進基本計画では、働く世代のがんサバイバーへの支援を強化することを目標に掲げているが、その中でも30歳代後半から40歳代の女性については、男性よりがん罹患率が高いことから、重点的な支援の必要性が提言されている。

米国では女性のがんサバイバーを対象とした研究の大半は、がんである母親の体験に焦点を当てたものが多いが¹⁾、日本ではサバイバーである母親よりその子供や家族に焦点をあてた研究が大半を占めている²⁾。一方臨床ではサバイバーである母親は、子供に自身の病名の告知はしても、がんの再発や病状進行を伝えることを躊躇し、明るく振る舞うことで、しばしば体力的にも精神的にも無理をしながら療養生活を送っている姿をみかける。このような現状に対して、支援の必要性は提言されているものの³⁾、具体的な方法やその効果については報告されていない。

2. 研究の目的

(1) 現在治療中である母親役割をもつがんサバイバーの思いを分析する。

(2) すでに死別している母親ががんサバイバーであった子供(女子)の思いと、現在療養中のがんサバイバーである子供(女子)の思いを比較する。

(3) 母親役割をもつがんサバイバーの対人関係における葛藤を明らかにする。

(4) (3)で明らかとなった母親役割をもつがんサバイバーの被援助志向性と自己隠蔽性について、それらが一般的といえるかどうかについて統計学的に解析する。

3. 研究の方法

(1) 母親役割をもつがんサバイバー5名について、現在感じている思いや不安について、半構成的インタビューを行い、語られた内容を質的に分析した。

(2) 現在母親ががんサバイバーである子供(女子)5人については、同日、母親とは離れた場所と時間を設定し、個別に半構成的インタビューをおこない、すでに死別しているがんサバイバーの子供(女子)については、別日にインタビューの機会を設定し、それぞれに語られた内容を質的に比較分析した。尚、死別を経験した子供とは、現在はすでに成人している女性であるが、過去の記憶を振り返る形でのインタビューとした。

(3) (1)の結果を受け、再発転移後に治療が無効となり、現在は症状緩和を中心に療養を続けているがん終末期患者3名を対象に、対人関係における葛藤について半構成的インタビューを行い、語られた内容を質的に分析した。

(4) 母親役割をもつがんサバイバーの被援助志向性、自己隠蔽性について、無記名の自記式質問紙を用いて調査し(有効回答数120名を予定)、回答について多変量解析を行う予定である。

4. 研究成果

(1) 母親役割をもつがんサバイバーは、「日常的な体調不良の継続」、「死の不安」を柱とした『身体の不安』、「娘には正確な病状を伝えていない」、「遺伝性がんの不安」を柱にした『娘への配慮』、「周囲の人々にはがん患者であることを言いたくない」、「がん患者であることは知られたくない」を柱にした『サポート不足』が抽出され、自身のことだけでなく、周囲の人々との関係性について考えるところが多いことが明らかになった。

(2) 現在母親ががんサバイバーである子供にとって正確な情報を聞きたくない思いがある一方、正確な情報を教えてもらえないことによる不安があることが明らかとなった。またすでに死別しているサバイバーの子供については、不安、教えてもらえなかった怒り、知ろうとしなかった自分に対する自責の念、何もできなかった心残り、未だ解消されない悲嘆という過程を経験していることが明らかとなった。がんサバイバーである母親の生前から、子供へのケアも並行して行っていく必要があることが改めて示唆された。

(3) 症状緩和を中心に療養を続けているがん終末期患者の対人関係における葛藤は、「自分自身に対する葛藤」、「娘に対する葛藤」、「夫に対する葛藤」、「自身の母親に対する葛藤」の4つのキーワードに集約された。「自分自身に対する葛藤」については、「死期が近いことに対する諦め」と「もっと生きたいという希望」との間に葛藤があり、「娘に対する葛藤」については、「がん患者である母親を労わらない娘に対する怒りと諦め」、「娘の悲しむ姿を見たくないという気遣い」、「自身の母親に対する葛藤」は、「母親の前では体調が悪くても元気に振舞ってしまうといった母親を心配させないための気遣い」と「母にも弱音を吐けないという諦め」といった相反感情が表出されたが、「夫に対する葛藤」には、特別な気遣いはなく、むしろ「夫には何も期待しないという諦め」の感情のみが表出された。

対象者はいずれも終末期であるため、子供達にはすでに主治医から患者が終末期にあることを告げられている。そのため、本研究の当初の目的であった、「病状を説明する際に生じる葛藤」からは外れている。しかし子供が、どのように理解しているのか、また自分の気持ちがどこまで伝わっているのかについては、話あったことがないため、わからないと言う葛藤は解消されていないことが示唆された。

(4) 上記(1)～(3)で明らかになった分析結果は、一般的傾向といえるかどうかの検証を行うために、引き続き量的研究を行う予定であったが、対象者の選定に時間を要しているため、結果の抽出には至っていない。今後も引き続き調査対象者を増やし、統計学的に検証したい。

<引用文献>

- 1) Semple CJ, McCance T : Parents' experience of cancer who have young children: a literature review. Cancer Nurs. Mar-Apr; 33(2):110-8.2010
- 2) 廣津美恵, 辻川真弓, 大西和子: がん患者・家族の抱える困難の分析—三重県がん相談支援センターにおけるがん患者・家族との面接を通して—:三重看護学誌 12,19-29.2010
- 3) 根本秀美: 進行性乳がん罹患した母親の子供への告知とその反応: 臨床死生学 10(1), 18-27.2005

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Akemi Kurihara, Okio Hino
2. 発表標題 Suffering of the female cancer patient informed of recurrence who has multiple problems for mother and child relations
3. 学会等名 Annual Meeting on Supportive Care In Cancer (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akemi Kurihara, Yoko Tabe
2. 発表標題 Conflicted feeling of the cancer patient with mother-daughter relationship problem
3. 学会等名 Global Academic Programs Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 栗原明美, 樋野興夫
2. 発表標題 Grief caused by the death of female cancer patients : daughters perspectives
3. 学会等名 Global Academic Programs Conference 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 栗原明美, 樋野興夫
2. 発表標題 母親役割をもつがん患者の不安
3. 学会等名 第23回日本緩和医療学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 栗原明美
2. 発表標題 がん患者の母親をもつ子供の不安
3. 学会等名 第9回日本不安症学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岩清水 伴美 (Iwashimizu Tomomi) (60516748)	順天堂大学・保健看護学部・教授 (32620)	
研究分担者	樋野 興夫 (Hino Okio) (90127910)	順天堂大学・医学部・教授 (32620)	